

トランプ大統領の英語を添削する

星 野 三喜夫

2019年1月

新潟産業大学経済学部紀要 第52号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.52 January 2019

トランプ大統領の英語を添削する

Check and Correct U.S. President Donald J. Trump's English

星野三喜夫

Mikio HOSHINO

要旨

トランプ米国大統領の英語を主要歴代大統領や彼と大統領選で戦った候補と比較すると、文法は小学校5年から6年生レベル、語彙は8年生に届かない低いレベルである。また彼の英語には、繰り返しや口語的な誇張表現の多用が見られ、スラングや上品でない言葉も含まれる。トランプ大統領が自ら認めたと思われる、2018年5月24日付けの北朝鮮金正恩労働党委員長に宛てた首脳会談の「中止」を告げる書簡をチェックすると、語法や言い回しにおいて指摘すべき点が多々ある。英語を母語とする人が、たとえ米国の大統領であったとしても、必ずしも相応しい英語を書く訳ではなく、時には間違った、あるいは望ましくない英語を書いている。トランプ大統領がSNS等で書く英語は子供っぽく、また誇張表現や感情表現が多いが、スピーチライターが慎重を期して書き、トランプ大統領がゆっくり発している大統領選勝利演説や大統領指名受諾演説、一般教書演説等は英語学習において有用である。英語学習者はその点を踏まえて彼の英語を活用するのが良い。

キーワード：トランプ大統領、英語、添削、米朝首脳会談、可読性、北朝鮮、金正恩

はじめに

2018年6月12日、シンガポール・セントーサ島のカペラホテルで、ドナルド・ジョン・トランプ (Donald John Trump) 第45代アメリカ合衆国大統領 (以下、トランプ大統領) と金正恩 (Kim Jong Un) 北朝鮮労働党委員長 (以下、金委員長) との史上初の米・北朝鮮首脳会談 (以下、米朝首脳会談) が開催され、世界の人々はその様子をテレビやネットを通じて固唾を飲んで見守った (会談自体は非公開)。それに先立つ同年5月24日に、トランプ大統領は金委員長宛に首脳会談の「中止」を通告する書簡 (以下、書簡) を唐突に発出しており、それから3週間も経ないで米朝首脳会談が開かれた。

米朝首脳会談の「中止」の理由は、書簡 (図表2、図表3) にあるように、“..., based on the tremendous anger and open hostility displayed in your most recent statement, I feel it is inappropriate, at this time, to have this long-planned meeting.” (貴殿<=金委員長>の直近

の発言が示したとてつもない怒りとあからさまな敵対心を踏まえると、長い間練ってきたこの会談を実施するのは、現時点では、不適切だと感じる) として、“The world, and North Korea in particular, has lost a great opportunity for lasting peace and great prosperity and wealth. This missed opportunity is a truly sad moment in history.” (世界は、特に北朝鮮は、永続的な平和と素晴らしい繁栄と富を得る素晴らしい機会を失った。この失われた機会は歴史において実に嘆かわしい瞬間である) と書いている。米国の大統領が自身の署名を付した書簡を、これほど激しい言葉を使って外国首脳に直に宛てて出すのは異例であるが、多分にトランプ大統領の外交上の交渉戦術 (駆け引き) に基づいていると見ることもできる。

米国の大統領は、例えばスピーチを行う場合、その中身は通常、特別に雇い入れている名うてのスピーチライターが慎重には慎重を期し、練りに練って書くことから、使われる語彙や論理の展

開、レトリック等がしっかりしており、英語を母語としない英語学習者にとっては格好の学習教材になる。一方、書簡を読む限り、その内容や形式、使われている語彙や語法からして、書簡は恐らくトランプ大統領が自ら書き、スピーチライターはもちろん、ホワイトハウスの取り巻きも推敲しないうちに、あれよあれよという間に発出されてしまったのではないかと筆者は推測する。

トランプ大統領はツイッター（Twitter）等のSNSを駆使して、自身の考えや方針、行動等を日に何度も発信している。筆者はそれを読んで一人であるが、中身以上に、その英語表現について注目してきた。彼のプレスとの会見での応答やSNSで使う英語は、使用されている語彙も含めて、歴代大統領に比べてかなり平易である。それは文法も含めて中学生レベルと言っても良く、しかも映像に現れる彼の口頭での発音はゆっくりであるため、英語を母語としない英語学習初心者でも十分聴き取れるものである。

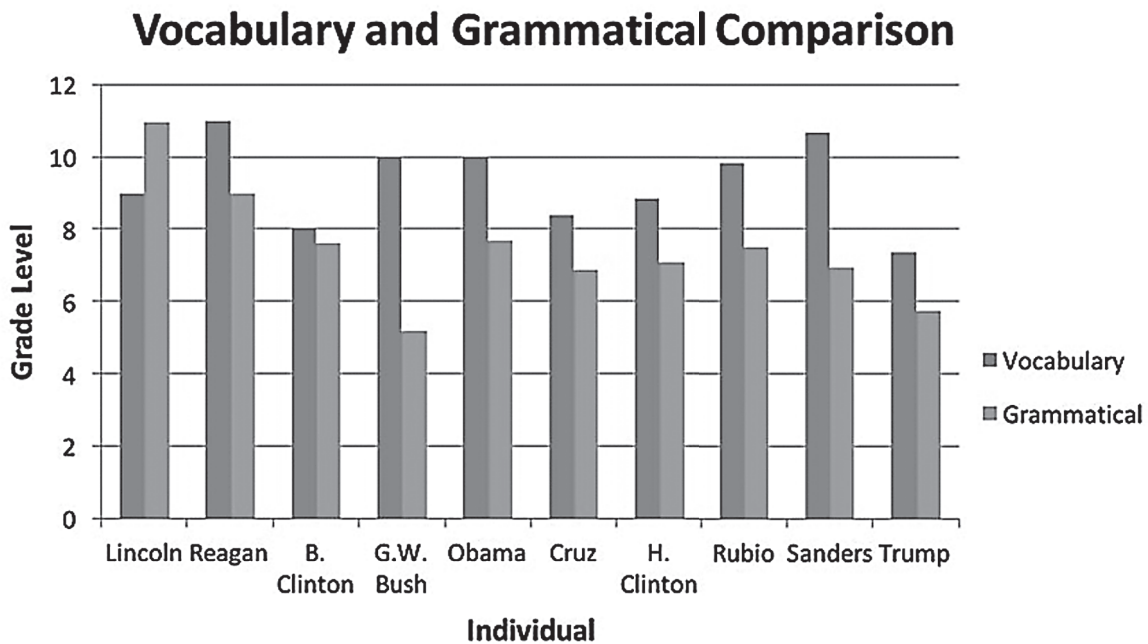
本稿では、トランプ大統領の英語の語彙と文法のレベルが相対的にどうなのかをまず確認し、次に彼の英語の特徴を明らかにする。その上で、彼が自ら書いたと思われる2018年5月24日付けの北朝鮮の金委員長に宛てた米朝首脳会談の「中止」

を告げた書簡を、その形式や英語表現を含め詳細にチェックして、その評価を試みる。

1. トランプ大統領の英語の語彙と文法レベル

トランプ大統領の英語の語彙（vocabulary）と文法（grammar）のレベルを示す興味深い調査がある。図表1は米国のカーネギーメロン大学の言語技術研究所（Carnegie Mellon University's Language Technologies Institute）が公表した、主要な歴代米国大統領等のスピーチの「可読性分析」（readability analysis：読み易さ分析）の比較調査結果である。調査は、リンカーン大統領（Abraham Lincoln、第16代大統領）をベンチマークにして（表の左端）、レーガン大統領（Ronald Wilson Reagan、第40代大統領）、クリントン大統領（William Jefferson Clinton、第42代大統領）、ブッシュ（ジュニア）大統領（George Walker Bush第43代大統領）、オバマ大統領（Barack Hussein Obama II、第44代大統領）と、トランプ氏との大統領選に登場した対戦候補のテッド・クルーズ（Rafael Edward "Ted" Cruz、共和党）、ヒラリー・クリントン（Hillary Rodham Clinton、民主党）、マルコ・ルビオ（Marco Antonio Rubio、共和

図表1 米主要歴代大統領等のスピーチの「可読性分析」



出典：LTI Analysis Finds Most Presidential Candidates Speak at Grade Levels Six Through Eight
 Carnegie Mellon University's Language Technologies Institute (LTI)
<https://www.lti.cs.cmu.edu/news/lti-analysis-finds-most-presidential-candidates-speak-grade-levels-six-through-eight>

党)、バーニー・サンダース (Bernard "Bernie" Sanders、民主党) の各氏が、選挙期間中のスピーチで使用した平均的な語彙と文法と、トランプ大統領が大統領選挙期間中に使用したそれとを比較して行った可読性の分析である。図表で示される“Grade Level”は、米国の初等中等教育の学年(レベル1は小学1年生 (=6歳)、レベル8は中学2年生 (=13歳)) で教わる語彙と文法に相当する。

この調査結果によると、対象となった主要歴代大統領や大統領候補者は、小学5年生から8年生(中学2年生)のレベルの文法と語彙を使用していることが分かる。これは、公約や政策を米国民に訴える際に、敢えて平易な言い回しと言葉(語彙)を選んで、分かり易さを重視しているからである。一方、トランプ大統領の文法と語彙(表の右端)のレベルは相対的に低い。図表から分かることは、トランプ大統領が使う英語の文法は小学校5年から6年生レベル(ブッシュ大統領よりはかろうじて高い)、語彙は8年生に届かないレベルで10人中最も低い。結果的に、対戦候補者(クルーズ氏、(ヒラリー)クリントン氏、ルビオ氏、サンダース氏)を押さえてトランプ氏が大統領になったことを考えれば、スピーチでの文法や語彙のレベル(低さ)は、少なくとも大統領選挙では影響を与えていない(使用語彙・文法のレベルの高さと人気、選挙結果には相関関係がない)ことを示している。

穿ち過ぎかも知れないが、もしかしたらトランプ大統領は、意図的、意識的に難易度の低い、つまり小学生や中学生の低学年でも分かる英語、日常生活で使うレベルの英語を使った(使っている)可能性がある。というのは、彼の支持層(票田)が、中西部と大西洋岸中部地域のラストベルト(rust belt¹)の高卒以下の白人ブルーカラー層と言われているからである。そういう人々が抱える不満を、トランプ大統領がその人たちにも十分分かる英語で代弁して多くの支持を得、票を獲得したと見ることもできる。

2. トランプ大統領の英語の特徴

トランプ大統領のスピーチやSNSでのツイートは、易しい言葉のフレーズが繰り返し使われている。例えば、“very very”や“many many”等の形容語の繰り返し表現(これを「幼児表現」と言う人もいる)や、“absolutely”(まったく、断然)、“not a big deal”(大したことはない)等の口語的な誇張表現の多用が見られる。また、これまでの大統領のように、第一人称の主語は“we”ではなく“I”を多用するのも彼の英語の特徴である。さらに、その話し方も独特である。常に手および指でリズムを取りながら、一言一言ゆっくりと、また言葉を選ばずストレートに(そして時には過激に)はっきりと語られる。タイピングが得意な人なら、一言一句を漏らさず書き取られて(入力できて)しまう速さである。その意味で、英米語圏以外の英語を母語としない英語学習者にとって、リスニングやリーディングにおいてはトランプ大統領の英語は格好の学習教材となる。

他方、文法や語彙のレベルはともかく、スラングや上品ではない(米国流に言えば、politically correct(PC)ではない)言葉や表現が多く含まれている点で、きちんとした英語を学びたい非英語母語者は気を付ける必要がある。例を挙げれば、事実でないデタラメな内容、情報である“fake news”(フェイクニュース)を垂れ流す(とトランプ大統領が主張する)メディアに対し、“Get the hell out of here!”(とっとと失せろ)や、“Mexicans are rapists.”(メキシコ人はレイプ犯だ)、“China is raping America.”(中国がアメリカを強姦している)、あるいは、安倍首相に対しトランプ氏が大統領就任前に言った“Abe is a killer”等である。最後の例で、日本の一部メディアがこの表現を「安倍は殺人者だ」と訳したが、日本のメディアは全体的に「反権力」(反安倍)色の論陣を張ることが多く、それ故に敢えてこのように毒のある訳し方をしたのかも知れない。この場合の“killer”は、少し大きな辞書を見れば直ぐに分かるように、“formidable”「あなどりがたい」や“impressive”²「印象的な」、

¹ rust は「錆」という意味で、使われなくなった工場や機械を指す。

² オクスフォード・ディクショナリー (Oxford Dictionary)

「驚異的な人」、「すごいやつ」³といった好意的、積極的な意味もあり、ここでは「安倍はすごいやつだ」や「安倍はやり手だ」といった、安倍首相を好意的に褒めている表現として使ったと解するのが適当であろう。スラングや下品な言葉を使うという点でトランプ大統領は通訳者泣かせである。特にその場で訳さないといけない同時通訳者は、彼の英語に神経を擦り減らし苦勞をしているであろう。

このように、トランプ大統領のシンプルな英語を字面そのままに受け止めてしまうと誤解を生じかねない部分はある。しかし、スピーチライターが練りに練り、推敲に推敲を重ねて書き、実際に彼によって弁ぜられる、例えば共和党大統領候補指名受諾演説（2016年7月23日）や大統領就任演説（“U.S. President Inaugural Address” 2017年1月20日）は、当然英語の表現も中身もしっかりしており、しかもゆっくりと語られていることから、こちらの方は有用な英語学習教材となる。

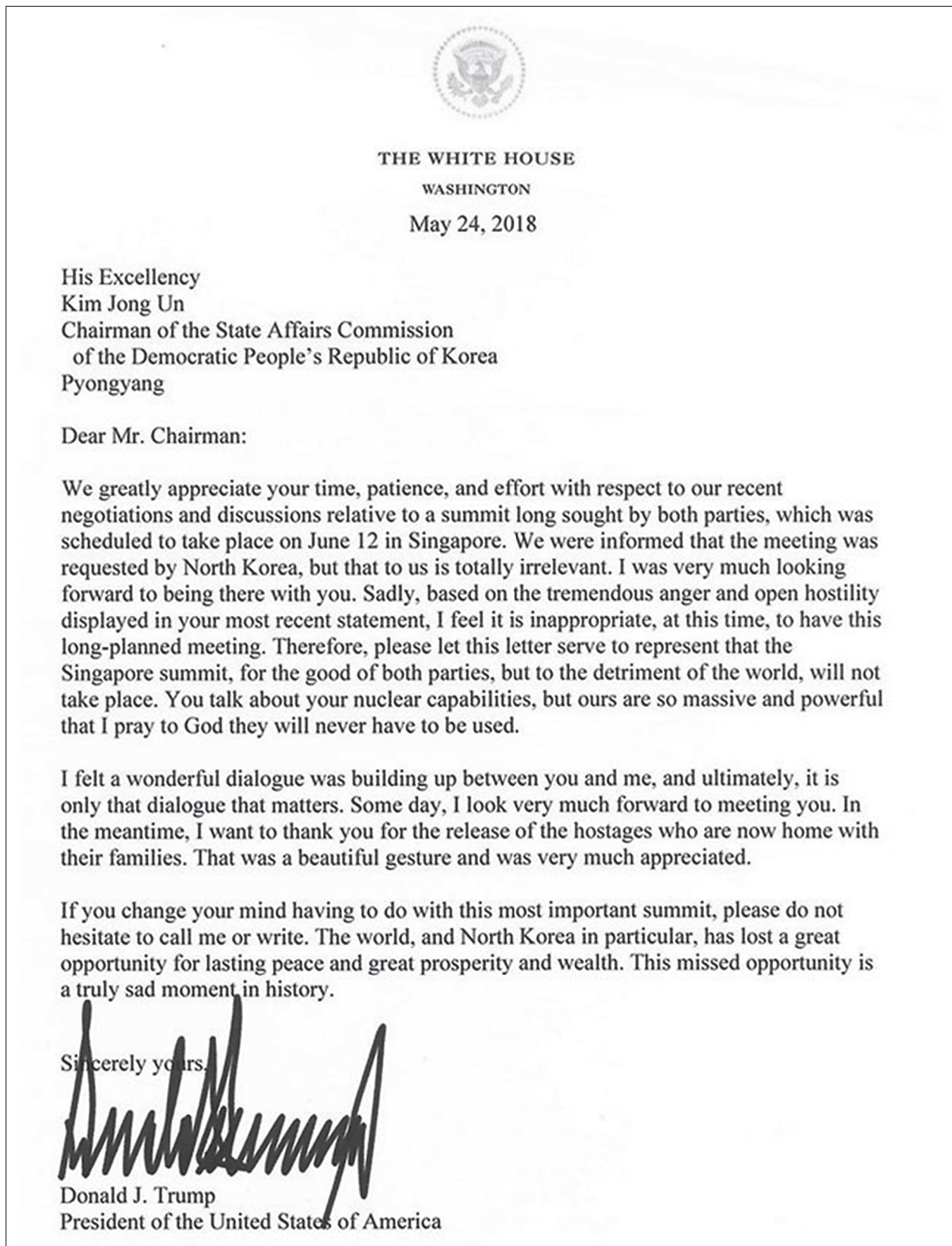
3. 書簡の英語を添削する

さて、ここまで、トランプ大統領の英語の語彙と文法は主要な歴代大統領や大統領選候補者と比較して、「可読性」(readability)の点においてレベルが低く、また彼の英語は繰り返しや口語的誇張表現が多用され、スラングや上品でない言葉が含まれることをみてきた。以下では、スピーチライターが練りに練って、推敲に推敲を重ねて書いた「正規」の英語ではなく、トランプ大統領自身が、急いで認め発出したと思われる書簡を取り上げて、語彙と文法が歴代大統領や大統領選競合相手のそれよりも低い、つまり上で挙げたように、文法は小学校6年生レベル、語彙が8年生に届かないレベルなのかどうかを細部にわたってチェックしてみる。書簡の形式、彼の英語の特徴、さらには書簡で認められている英語表現の問題点（文法や語法、言い回し等）を具体的に、筆者の（英語あるいは英文に対する思い入れや拘りを多分に含む）視点からの指摘を行い、英語ネイティブもいつも状況に相応しい英語を書く訳ではなく、時には間違ったあるいは望ましくない英語表現を用いるのだ、ということの例証を試みる。

因みに、書簡（図表2）に対し筆者が試みた日本語訳は図表3の通りである。筆者の力量では、ナマの英文と比較して、日本語訳がどうしても「丁寧」なものになってしまうが、オリジナルの英語は日本語訳ほど丁寧なものではない。

³ 研究社リーダーズ英和辞典

図表2 2018年5月24日付けトランプ大統領「書簡」



出典 : Letter to Chairman Kim Jong Un, The White House, May 24, 2018

図表3 「書簡」日本語訳

(ロゴ)
ホワイトハウス
ワシントン
2018年5月24日

金正恩朝鮮労働党委員長 閣下
朝鮮民主主義人民共和国
平壤

拝啓

6月12日にシンガポールで開催予定であった首脳会談は双方が長く求めてきたものであり、そのための最近の交渉や話し合いに貴殿がかけてきた時間と忍耐、努力にとっても感謝する。会談は北朝鮮から求められたものだとは知らされていたが、それは私たちにはまったく大事なことはない。私は会談で貴殿と会うのを大変楽しみにしていた。残念なことに、貴殿の直近の発言が示したとてつもない怒りとあからさまな敵対心を踏まえると、長い間練ってきたこの会談を実施するのは、現時点では、不適切であると感じる。従って、この書簡により、シンガポール首脳会談は、双方の利益のために、しかし世界の不利益ではあるが、開かれたいと理解して欲しい。貴殿は自国の核能力の話をするが、我が方のそれはとても巨大で強力であり、私はそれが決して使われずに済むよう神に祈る。

貴殿と私との間に素晴らしい対話が築かれていると私は感じていたし、究極的に大事なはその対話だけである。いつの日か、ぜひとも貴殿に会えることを願っている。差し当たり、もう既に米国に戻り家族と共にいる捕虜の解放に感謝する。それは素晴らしい対応であり、とてもありがたく思う。

この上なく大事なこの首脳会談について、もし貴殿が考えを変えるようであれば、躊躇せずに私に電話するなり手紙を書くなりして欲しい。世界は、特に北朝鮮は、永続的な平和と素晴らしい繁栄と富を得る素晴らしい機会を失った。この失われた機会は歴史において実に嘆かわしい瞬間である。

敬具
(署名)
ドナルドJトランプ
アメリカ合衆国大統領

筆者作成

(1) 5つのC

まず、どの言語であれ、手紙を書く際の基本原則と言われる「5つのC」の観点から書簡を見るとどうであろうか。5つのCは、「明快」(Clear)、「完結」(Complete)、「簡潔」

(Concise)、「正確」(Correct)、「丁寧」(Courteous)のCである⁴。政治上あるいは外交戦略上の書信であっても(むしろそのような書信であるからこそ)これらの5要素はきちんと踏

⁴ 「完結」(Complete)のCに代わり、「具体性」(Concrete)や「個性」(Character)のCをもって5Cとすることもある。

まえられていることが大切である。書簡で筆者が気になるのが「簡潔」と「丁寧」のCである。アウトラインを考えず、思い付きで書く書信は、時に要点から逸脱したり、余計な情報を入れてしまうことによって簡潔さや丁寧さを欠き易くなる。書簡を日本語に訳すと、いかにもビジネス文書的で丁寧な印象を受けるが、オリジナルの英語はそれほど簡潔でも丁寧でもない。具体的な説明は「本文」(body)の項で書くが、「丁寧」さに欠けるという点に関しては、トランプ大統領が敢えて上から目線となるよう意図して書簡を書いたのかも知れない。

(2) 書信用紙頭書 (letterhead)

レターヘッドは書信の冒頭に記載(印刷)され、発信者の名前と住所を一見して受信者に分からせるものである。書簡では印刷されている米国政府ホワイトハウスの通常のものでロゴタイプと一緒に使用されている。問題はない。

(3) 発信日付 (dateline)

発信日付の“May 24, 2018”は、米国人の大統領らしく、米国式、つまり<月、日(基数)、年>の順となっている。もちろん問題はない。発信日付は、完全なブロックスタイル(後述)であれば左に寄せられるが、書簡ではレターヘッドの真下中央にある。これも特に問題ない。発信日付の位置は、英国式では書中宛名(後述)の下に置かれることもあるが、米国式では書中宛名より上に来るのが一般的であり、書簡の発信日付は米国式に倣っている。

(4) 書中宛名 (inside address)

書中宛名は受信者(宛先)の名前と肩書、敬称、受信者の住所、国名(受信者が外国の場合)を書き込む。書簡で使用されている金委員長の敬称(title)はHis Excellencyで、これは外交儀礼上、外国の最高位者(大統領、首相等)に対し付される。日本語に訳せば「閣下」であろうか。書簡は敬称と名前が別ラインにあるが、同一ラインに並べる、すなわち、“His Excellency Kim Jong Un”(金正恩閣下)とするのが正しい。これは、Mr.とMikio Hoshinoを別ラインに並べられたら筆者が違和感を覚えるのと同じである。金委員長

は北朝鮮の最高指導者で、朝鮮労働党委員長である。その英文の肩書は“Chairman of the State Affairs Commission of the Democratic People’s Republic of Korea”であり、(Democratic=民主主義であるかどうかはともかく)正しく表記されている。住所には国名がない。Pyongyangの後にはカンマを入れて“North Korea”と(簡略版)国名は加えるべきであろう。

(5) 冒頭敬辞 (opening salutation)

冒頭敬辞は日本語の拝啓、謹啓、拝復等にあたる書き出しの挨拶である。日本語の書信と異なり、英文書信では男・女・単数・複数の区別があり複雑で、発信者が気を遣う部分である。書簡では“Dear Mr. Chairman:”と表記されている。書中宛名で最高位敬称“His Excellency”と個人名“Kim Jong Un”を書いているので、ここでは、肩書を使って“Dear Mr. Chairman:”(委員長殿)としたのであろう。formalではあるが、やや冷たい印象を与える。ここで“Dear Jong Un”とすればフレンドリーで親しみが込められる(ビジネス文書ではその種の親しさを演出することが多い)が、敢えてそこまでしなかった(事実上はまったく親しくない)のであるから、そこまでする必要がなかった)のだろう。冒頭敬辞は英国式ではカンマの「,」を付すが、ここでは米国で使われることが多いコロンの「:」が使われている。カンマが正統であり、厳しい添削者であればコロンはカンマに直される(なお、英文法のルールに従って本文中や各行内に必要な句読点や略語のピリオドを打つ以外は、各行末にいっさい句読点を入れないopen punctuation(開放式区読法)で書かれる書信では、冒頭敬辞には「,」や「:」が付されない)。

(6) 件名 (subject line)

ビジネス文書では、冒頭敬辞の次に、文書の内容がどのようなものであるかが一目でわかるように、“Re: ……”や“Subject: ……”という書き出し(「. . . . の件」「件名:」)や、下線を付して件名を付けることが多い。書簡は国の首脳間の遣り取りに当たり件名が付されていないが、この点はまったく問題はない。敢えて書簡に件名を示すとすれば“Singapore Summit”か

“Singapore Meeting”となるであろうか。

(7) 本文 (body)

全体

書簡は、行の全てを左マージンに揃える（つまり、各パラグラフの書き出しの最初の行の冒頭を3～6文字分引っ込める（=indent）ことをしない）ブロック形式（block format）で書かれている。米国での書信ではこのスタイルが一般的になっているが、上に書いたように、発信日付が左端ではなく中央に位置しており、その点で完全なブロック形式（full block format）ではない。トランプ大統領名で発出されている他の文書を見てもこのスタイル（modified block formatと言っても良いと思う）が多い。伝統的なindent方式（open format）が廃れて、書き易い（打鍵し易い）block方式が好まれるようになってきているのが英文書信の世界的な傾向である。

本文は3つのパラグラフ（段落）から成る。一見して第1パラグラフ（10行）が非常に長く、第2

パラグラフ（4行）、第3パラグラフ（4行）が短い。パラグラフ間で長さの釣り合いが取れていないという点で体裁的な見栄えがよくない。また、全体を読み進んでいくと、第1パラグラフの最初で、“we”、“us”の一人称が使われているが、同じ第1パラグラフ後段から第2パラグラフ、第3パラグラフでは“I”、“me”が使用されており、一貫性の点で統一が望ましい。第2パラグラフの書き出しの“We were informed that. . .”を考えると（ここで“I was informed that...”は無理があるので）、“we”、“us”で統一するのが良いかも知れない。“I”や“me”よりも“we”や“us”の方が「大統領個人ではなく、国を代表する大統領として」述べている、といったニュアンスが出る。

書簡本文の英語表現は、添削者として「突っ込みどころ」が満載である。以下、パラグラフ毎に見ていきたい。便宜上、書簡中に番号を付して説明する。

(i) 第1パラグラフ

① We greatly appreciate your time, patience, and effort with respect to our recent negotiations and discussions relative to a summit long sought by both parties, which was scheduled to take place on June 12 in Singapore. ② We were informed that the meeting was requested by North Korea, but that to us is totally irrelevant. I was very much looking forward to being there with you. ③ Sadly, based on the tremendous anger and open hostility displayed in your most recent statement, ④ I feel it is inappropriate, at this time, to have this long-planned meeting. Therefore, ⑤ please let this letter serve to represent that the Singapore summit, ⑥ for the good of both parties, ⑦ but to the detriment of the world, will not take place. ⑧ You talk about your nuclear capabilities, but ours are so massive and powerful that I pray to God they will never have to be used.

ビジネス文書を書く時には、“One Topic in One Paragraph”（一つのパラグラフに一つの主題）という原則がある。そして、文の流れに留意しつつも、大切な要件はできるだけ最初の（あるいは最初の方の）パラグラフに持ってくるよう心掛けるのが良い文書の鉄則である。書簡はその鉄則に従って書かれている印象はない。

最初にいきなり①“We greatly appreciate your time, patience, and effort with respect to our recent negotiations and discussions...”（最近の交渉や話し合いに貴殿がかけてきた時間と忍

耐、努力にとっても感謝する. . .）と述べているが、書簡は国同士の首脳から首脳への書信であって、いわゆる一般的なビジネス文書ではないのであるから、この表現は金委員長に対する「不要な迎合」の印象を受ける。また、パラグラフの中段で③“Sadly, based on the tremendous anger and open hostility displayed in your most recent statement”（残念なことに、貴殿の直近の発言が示したとてつもない怒りとあからさまな敵対心を踏まえると）、④“I feel it is inappropriate, at this time, to have this long-planned meeting”

(長い間練ってきたこの会談を実施するのは、現時点では、不適切だと感じる)と書かれており、これを冒頭の「貴殿がかけてきた時間と忍耐、努力にとっても感謝する」から読み進めると強い違和感(落差)を覚える。敢えて皮肉って“greatly appreciate”(とても感謝する)と書いたのかも知れないが。

この①の部分の表現は、筆者なら“and effort”のカンマ(,)を取り(英語ではこれが正しい表記の仕方である)、また、“with respect to”は同じ文の中に“relative to”が続くので重く感じる。inかonまたはconcerningの一語に直して、“I (またはwe) note your time, patience and effort in our recent negotiations and discussions…”

(最近の交渉や話し合いに貴殿がかけてきた時間と忍耐、努力を多とする…)としたらどうだろうか。“relative to”も“regarding”か“about”の一語で良い。“a summit long sought by both parties, which was scheduled to take place on June 12 in Singapore.”のaをtheに改めて、“the summit”として、“the summit which was long sought by the both parties and scheduled to take place on…”とすると英文としてすっきりする。つまり、“We note your time, patience and effort in our recent negotiations and discussions regarding the summit which was long sought by the both parties and scheduled to take place on June 12 in Singapore.”ではどうであろうか。

② “We were informed that the meeting was requested by North Korea, but that to us is totally irrelevant.”(会談は北朝鮮から求められたものだとは知らされていたが、それは私たちにはまったく大事なことではない)とあるが、この文自体がまさに大事ではなく不要(irrelevant)である。「大事なことではない」ならここで書く必要はない。totallyはまさしくまったく(totally)大げさな(inflated)口語表現であり、書簡に相応しくない。

③ “Sadly, based on the tremendous anger and open hostility”(残念なことに、とてつもない怒りとあからさまな敵対心を踏まえると)の、“Sadly”(残念なことに)は感情表現であり、外交文書では使用を控えるのが良い。また、tremendousといった中身の無い誇張表現

(exaggeration)はトランプ大統領がTwitterやメディアの前で好んで使用するが、口頭やSNSで使うのならまだしも、正式(かつ外交)の文書で使用するのは相応しくない。“open hostility”のopenは不要である。(hostilityにはopenの意味が含まれておりclosed hostilityなどない。)

④ “I feel it is inappropriate, at this time, to have this long-planned meeting.”(長い間練ってきたこの会談を実施するのは、現時点では、不適切であると感じる)は、“I (またはWe) feel it inappropriate to have this long-planned meeting at this time.”(長い間練ってきたこの会談を現時点で実施するのは不適切だと感じる)にする(“is”をとり“at this time”の位置を変える)方が明瞭ですっきりする。

⑤ “please let this letter serve to represent that…”(この書簡により、...と理解して欲しい)は如何にも「まどろっこしい」表現である。特にrepresentがよろしくない。ここは平易に“please know by this letter that…”か“please be informed that…”、または“this letter is to let you know that…”で良い。あるいは、“please let this letter serve to represent that”全体を削除し、“the Singapore summit ...will not take place”だけにするとさらにシンプルですっきりする。

⑦ “but to the detriment of the world”(世界の不利益ではあるが)は、その前の⑥“for the good of both parties”(双方の利益のために)と矛盾する。不要(irrelevant)であり書く必要はない。

⑧ “You talk about your nuclear capabilities, but ours are so massive and powerful that I pray to God they will never have to be used.”

(貴殿は自国の核能力の話をするが、我が方のそれはとても巨大で強力であり、それが決して使われずに済むよう私は神に祈る)は、シンガポールで予定されていた会談の中止通告に関連して米国の力を鼓舞したのであろうが、何故ここで急に核能力の話題が出てくるのか。核問題はシンガポールでの首脳会談で話されるべき重要なテーマの1つであり、唐突感が否めない。また、宗教に関連する“God”(キリスト教の創造主)という言葉を書信に使うのもよろしくなく、この文全体を削除してしまうのが良い。なお、“have to”は語法上も余計である。

(ii) 第2パラグラフ

① I felt a wonderful dialogue was building up between you and me, ② and ultimately, it is only that dialogue that matters. ③ Some day, I look very much forward to meeting you. In the meantime, ④ I want to thank you for the release of the hostages who are now home with their families. That was a beautiful gesture and was very much appreciated.

① “I felt a wonderful dialogue was building up between you and me,” (貴殿と私との間に素晴らしい対話が築かれていると感じていた)。トランプ大統領と金委員長の間には過去、“wonderful dialogue” (素晴らしい対話) などなく、互いを“little rocket man” (ちびのロケットマン) や“mad man” (気がふれた人)、“sick puppy” (病んだ子犬)、“deranged U.S. dotard” (狂ったアメリカの老いぼれ) と言ひ募って舌戦していた仲である。今回のシンガポール会談が実現すれば、史上初の素晴らしい米朝首脳対話になる筈であったのであり、その前に「素晴らしい対話が築かれていると感じた」とするのは事実と異なる。この一文を敢えて残すとすれば、“I (またはWe) felt that we were building a dialogue” (会話が築かれつつあると感じていた) が精々であろう。

② “and ultimately, it is only that dialogue that matters” (究極的に、大事なはその対話だけである) は意味不明である。削除然るべし。どうしても残したいのであれば、文脈上、“and” は“but”に変えるのが良い。

③ “Some day” はある特定の日 (“some specific day”) を指す。“Someday” (いつか、そのうち。“some time in the future”の意) と

書くべきである。これは英語母語者としては小学生レベルの誤りである⁵。かつ、“I (またはWe) look very much forward to meeting you someday.” (いつの日か、ぜひとも貴殿に会えることを願っている) のように後ろに持つていくのが良い。なお、“very much”は不要であるが、残すのであれば“I very much look forward to meeting you someday.”の語順が文法的に正しい。

④ “I want to thank you for the release of the hostages who are now home with their families. That was a beautiful gesture and was very much appreciated.” (もう既に米国に戻り家族と共にいる捕虜の解放に感謝する。それは素晴らしい対応であり、とてもありがたく思う) として、金委員長による捕虜の解放が「素晴らしい対応」 (“beautiful gesture”) であり、「とてもありがたく思う」 (“very much appreciated”) などと書いているが、“beautiful” (素晴らしい、美しい) の語彙に強い違和感を覚える。北朝鮮が無実の捕虜を解放するのは米国からすれば至極当然であり、それが「素晴らしい対応」であり「ありがたく思う」とは、言うに事欠いた美辞麗句だとしても如何なものだろうか。

(iii) 第3パラグラフ

① If you change your mind having to do with this most important summit, please do not hesitate to call me or write. ② The world, and North Korea in particular, has lost a great opportunity for lasting peace and great prosperity and wealth. ③ This missed opportunity is a truly sad moment in history.

① “If you change your mind having to do with this most important summit, please do not

⁵ “I want to go to Kashiwazaki again someday.” (いつかまた柏崎に行きたい) vs. “Mr. Yamada will be in Kashiawzaki some day in August.” (8月のどこかの日に山田さんは柏崎にいるだろう。)

hesitate to call me or write.”（この上なく大事なこの首脳会談について、もし貴殿が考えを変えようであれば、躊躇せずに私に電話するなり手紙を書くなりして欲しい）は、ビジネス文書の最後の部分で頻繁に使われる“If you have any question, please do not hesitate to contact us.”といった陳腐なジャーゴン=“jargon”（決まり切った言い方）を真似た表現である。対話のドアは閉ざされていないと言いたいのであろうが、首脳間の外交文書で使うのは相応しくない。その類の表現は、恰も企業の（それもそう大きくない企業で、書信を秘書ではなく自ら書かなければならないような個人経営の）社長が営業用によく、親密さを装いながらも遠慮と温かみも感じられない慥無礼な（“blunt”）表現である。そのようなことからしても、書簡はビジネス交渉に長けていると自負するトランプ大統領自身が、まさしく自分で認めたのではないかと十分推測される。なお、“having to do with”は回りくどいので、“about”の一語で良い。また、“this most important summit”の“most”は不要である。“call me or write”は“call or write”が良い。

②“The world, and North Korea in particular, has lost a great opportunity for lasting peace and great prosperity and wealth.”（世界は、特に北朝鮮は、永続的な平和と素晴らしい繁栄と富を得る、素晴らしい機会を失った）。英語で、3つ以上のものを並べる時は、カンマ、カンマで、最後に（カンマなしで）andを付す、という基本中の基本をトランプ大統領は学校で習わなかったのであろうか。ここは、彼の表現を直に使うとすれば、“... a great opportunity for lasting peace, great prosperity and wealth”と書くべきであった。なお、1つのセンテンスに“great”が2度出て来るのもいけない。また、意味上、ここで“wealth”を敢えて入れる必要はないと思うが如何であろうか。

③“This missed opportunity is a truly sad moment in history.”（この失われた機会は歴史において実に嘆かわしい瞬間である）は、トランプ大統領の支援者がその頃言い出したノーベル平和賞（Nobel Peace Prize）の受賞を（満更でもない）意識して書いた表現なのであろうか。英語は、意図的に韻を踏む（rhyme）といっ

た類の例外を除き、直前に使った言葉の繰り返しを嫌う。直前に“lost a great opportunity”とあり、それを受けた“This missed opportunity”の“opportunity”は別の、例えば“occasion”等の表現に置き換えると良いであろう。

(8) 結尾敬辞 (complimentary close)

結尾敬辞は日本語の「敬具」、「かしこ」、「早々」等にあたり、冒頭敬辞（opening salutation）と共に英文書信では欠かせないものである。書簡では、米国に多い“Sincerely yours”（英国式では“Your sincerely”となる）が使用されている。儀礼的観点からすればこの表現はフォーマルであり、“Very truly yours”や“Faithfully yours”と比べてよりニュートラルな結尾敬辞である。問題はない。

(9) 署名 (signature)

結尾敬辞の下に記されるのが大切な署名であり、本文がタイプされていても書名は必ず手書きで記される。書簡はトランプ大統領に特徴のないもの大きなサインがなされている。大きさ自体は特に問題ではないが、署名が明らかに結尾敬辞にかかっている上、それを完全に突き抜けて第3パラグラフの最終行に達しそうな勢いで記されているのは、儀礼に悖る（受信者に失礼な）署名の仕方である。大きな署名をしたいのであれば、署名欄のスペースをもっと増やして結尾敬辞にかからないようにすべきである。なお、参考までにトランプ大統領が署名し発出している文書をチェックしてみると、書信の署名は多くないが、大統領令等の文書では署名スペースを広くとって署名が本文の行にかかっているケースは少ない様である。

以上、トランプ大統領が自ら認めたと思われる書簡の英語を、形式、特徴、表現上の問題点（文法や語法、言い回し等）を含めて、具体的に、かつ筆者の英語に対する思い入れや拘りを含めて指摘した。筆者ではない別の人が添削者であれば、別の指摘をするかもしれない。総じて、正統性を重んじる英語指導者の立場からは、書簡は語法上の誤りや不適當な語彙や表現等が多い「突っ込みどころ」満載の書信である。仮にビジネス書信の

「書き方」の授業において、学生からこのようなペーパーが提出されたとしたら、書簡は「70点」の合格点に達せず、書き直しを命じざるを得ないレベルである。

可読性（readability）の分析から、トランプ大統領の英語は使用されている語彙と文法のレベルが主要歴代大統領や大統領選候補者のそれよりも低いというのは上で見たとおりであるが、英語ネイティブの米国大統領であってもいつも正統で相応しい英語を書く訳ではなく、時には間違っていた、あるいは好ましくない英語も書いている。日本語もそうであるように、正確で要領良く英文を書くのは、英語母語の人にとっても難しいのである。

おわりに

本稿では、まずトランプ米大統領の英語の可読性（readability）を、主要歴代大統領や大統領選候補者と比較したデータをもとに、文法は小学校5年から6年生レベル、語彙は8年生に届かない低いレベルであること、彼の英語は繰り返しや口語的誇張表現の多用が見られ、時にスラングや上品でない言葉が含まれることを見てきた。次に、そのことを念頭に、トランプ大統領が自ら認めたと思われる、北朝鮮金委員長に対し米朝首脳会談の中止を告げた2018年5月24日付けの書簡をチェックした。そして、書簡は、文法や語法、言い回し等の点で「突っ込みどころ」満載であることを具体的に指摘した。英語を母語とする人が、たとえ米国大統領であっても、単独では、時には間違っただけあるいは望ましくない英語を書いているのである。正確にきちんと、要領良く英文を書くことが英語母語の人にとってもいかに難しいかが分かる。

このように、トランプ大統領が書いた書簡の英語には語法的な誤りが散見され、英語を教えている者からすれば子供っぽい表現や不要な表現が多々ある。また、プレスとの遣り取りやSNSで彼が個人的に発信する英語には、時に問題のある表現やスラングも含まれており、日本人英語学習者がトランプ大統領の英語をそのまま真似て覚えるのは相応しくない。他方、プレスでの遣り取りやSNSの英語を除けば、トランプ大統領の英語は、米国を代表する米国大統領が発するものとし

てスピーチライターが慎重を期し、また推敲を重ねて書いており、彼がゆっくりと声に出して発している大統領選勝利演説や大統領指名受諾演説、一般教書演説等はリスニングやリーディングにおいて有用な学習教材になる。日本人英語学習者は、そういったことを理解し、選別した上で彼の英語を活用するのが良い。

(了)

参考文献

LTI Analysis Finds Most Presidential Candidates Speak at Grade Levels Six Through Eight, Trump Generally Scores Lowest; Lincoln Remains Benchmark

<https://www.lti.cs.cmu.edu/>

Letter to Chairman Kim Jong Un (トランプ大統領からキム委員長に宛てた書簡)

The White House, May 24, 2018

<https://www.whitehouse.gov/briefings-statements/letter-chairman-kim-jong-un/>

星野三喜夫（2009年）『たかが英語、されど英語 日本人の「英語メタボ症候群の処方箋」』パレード（星雲社）

Check and Correct U.S. President Donald J. Trump's English

Mikio HOSHINO

2019年1月

新潟産業大学経済学部紀要 第52号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.52 January 2019